



水けむる秘湯の女影に夕日差す

三国山登山、法師温泉

2000年9月2日、私は高崎の桑田氏の私邸で朝を迎えた。その日、桑田氏と、磯部の刀根君とで、新潟県の三国山（1636メートル）に登ることにしていた。二君は私の会社の同僚である。

高崎の夜は蒸し暑く寝苦しく、私は夜中にTシャツを脱いで上半身裸になってやっと安眠できた。朝は冷え込むことを期待していたが朝も蒸し暑さは去らなかった。後でわかったのであるが、この時期の暑さとしては、群馬のある観測所では記録的なものであったという。

6時過ぎに起床し、桑田夫人の作られたサンドイッチとコーヒーを頂き、桑田氏からアonzの濃縮ペーストをスプーンで頂いた。鉄分が多く、貧血ぎみの彼はこれを毎朝欠かさないといい。

刀根君が桑田家にはち切れそうな短パン姿でやってきたのは7時をしばらく過ぎていた。橋を一つ間違えたので道に迷ったとのことだった。おかげで私は桑田氏に案内されて桑田家の庭を鑑賞する時間をもてた。自給のためのサツマイモも植えてあった。家の中で飼われているミニダックスフンドのユズが奥さんの部屋から出てきて私を吠え始めた。奥さんも出てきてユズをしかる。私になつかない犬というのは珍しい。小型の犬で家に飼われているのは神経質なのが多いように思える。

刀根君が来ると私らはすぐに出かけた。奥さんはおとなしくなった珍犬ユズを抱いて見送った。

刀根君の新車であるトヨタワゴンに乗って出発したのは7時20分くらいだったろうか。私は後ろの座席に座り、これはリクラインすることができた。高速道路はすいていて、運転する桑田氏は知らぬ間に100キロをオーバーしていた。しかしそれを追い越してく車が少なからずあった。新潟県に近づくと高速道路を降り、コンビニで昼食のおにぎりやパンを買った。私はおこわのおにぎりを二つ、魚と焼き鳥の缶詰、それにキュウリの漬物を買った。非常食としてのカロリーメイト2個とチョコレート少々はすでに調達していた。

三国トンネルの手前の駐車場に着いたのはまだ9時前だった。高速道路がすいていて予定よりかなり早く登山口に到着したのだ。

三国山に登る為にはいろんなコースが有るが、ここでは三国トンネルの手前の右斜面にある登山口より入る。三国峠まで1.6キロ、頂上まで2.2キロとあった。

久しぶりの登山だ。私は特に山が好きだということはないが、山に登るといつも子供の頃親しんだ野山の記憶がよみがえる。自然に囲まれて少年時代を過ごしたので、都市郊外に生活している今、自然は自然に懐かしさを私に抱かせる。小学時代、私は友達らと町のそばにある300メートルくらいの山々をよく登った。セミ取りや、ドングリ拾いや、写生をするために山に入った。また日頃の遊びに飽きたときにも、山に遊び場を求めた。

ある日、幼き私は、故郷広島県三原市の筆影山（311メートル）で、友達4・5人の先頭になって木の枝をかき分けながら新しく見つけた細い近道を登っていた。それは低木により周りの視界は閉ざされ、一列でしか進めないくらい細く、トンネルのようになった小道であった。少し開けた所に出た時、私は突然血にまみれた猿の死体を目の前に目撃してきゃあと悲鳴を上げ、振り向いて、みんなを急ぎ立てて引き返した。私の悲鳴に驚いた少年たちは、どうしたんな、どうしたんな、と言いながらも、危険を察知して道を引き返した。やがてその近道の入り口まで引き返した時、友達らは口々に私に何があったのかと問いつめた。私が見たままのことを言うと、彼らは筆影山には猿がないはずだと言った。それは確かに町での定説になっていたが、理論的にはよその山からこの山に猿がやって来るということは十分ありうることである。それでも友達らは納得しようとしなかった。

彼らはしかし私の驚きようのすごさに確かにそこに何かとても恐ろしい光景があったにちがいないと信ぜざるを得なかった。そして私が猿が死んでいたと言ったので、血まみれの猿が目をもいで死んでいるすさまじい光景を想像したにちがいない。（実際には私が見た猿は目を閉じていた。そして股が裂かれてあった。）

彼らは私の言うことを信じたにちがいないが、彼らはまた強い好奇心によりその光景を見てみたいという大きな願望をも抱いた。それで私を急ぎ立ててもう一度そこに戻ろうと言った。しかし私はもうおじけづいていてとても先頭に行く気はしなくなっていた。あの猿の死体を二度と見たくなかったし、それよりも、あの猿をそのように殺戮したより狂暴な動物が襲ってくるのではなからうかという恐怖もあった。だから行くのなら自分は先頭でなく後の方からついて行くと言い張った。しかしうわべとは別に確かに猿の死体があるにちがいないと信じていた彼らも誰も先頭に行くという勇気は奮い起こせなかった。そこで彼らは私の自尊心を刺激し、私にまた先頭に行く気にさせようとした。私の言っていることはすべてでたらめであり、猿なんかいないだと主張し始めた。その根拠は筆影山に猿がいるなんて聞いたことがないから、と同じことをくり返し言うのだった。それで彼らは私が腹を立てて「よっしゃ、じゃあついてこい、うそかほんとか見せてやらあ」と言ってまた先頭にたって彼らを現場に導いてくれることを期待しながら、私の言っていることはうそに決まっている「100万円かけるか、命にかけても本当か？」と言い

続け、私はもちろん「100万円と命をかけてもいいよ」と言うのだった。

そして結局、私はもちろん、だれもその細い近道を先頭になって引き戻し、私が見たというショッキングなシーンに対面する勇気はなく、ぶつぶつ言いながら通常の登山道を行ったのです。

空気の澄んだ山に登り、草木の香りを含んだこちよい風を身体に受けると、ふとこのようなことなどが思い出されてきて、懐かしさに浸ることができる。だから自然に戻って行くことはいつも喜ばしい。しかし山登りの肉体的苦勞はここ数年私を山に対し消極的にさせていた。

10時過ぎに三国峠にだどり着いた時、私はすでに暑さと、登りの疲れで、まいっていた。こんな時私はいつも、もう今回で登山はやめよう、と決心するのだが、意志の弱さでまたつい山に足が向いてしまう。

ベンチに座って更に登らねばならない三国山の嶺を恨めしく眺めた。そんなに高くはないが地図のガイドによるとあと1時間の行程である。

この峠には三国神社があり、これは神社兼避難小屋になっている。三国峠は古く、奈良から平安時代にかけて開かれ、旧三国街道がここを通り、上州と越後を結ぶ要所であり冬は難所であった。上州側には、表層雪崩で遭難死した8人の上州藩士を祭った墓があり、与謝野晶子が飲んだという晶子清水がある。（私は今その清水で汲んだ水で割った焼酎に氷を浮かべたのをちびちびやりながらこれを記している。）さらに行くと山の妖怪変化を封じたという大般若塚がある。

峠から三国山山頂までの登りは、ガレ石の急勾配だが、木製の立派な階段が行程の90%くらいに亘り整備されており登山靴でなくとも登れる。途中4ヶ所に休憩用ベンチがそれぞれ3つ4つあり便利である。登りながら私は、こんな立派な階段をつけるとは、きっと皇太子夫妻がここを登ることがあったので、そのために木製階段を準備したのだろうと考えた。あとで桑田氏の言うには、ここは崖崩れがあったので、山道が埋まり、そのためこのような階段を頂上まで設けたのだということだった。高い木はなく日陰のないつらい登り道だ。山頂に着いた時にまだ11時になっていなかったの、そこではただ写真を撮り、しばらく休憩すると来た道を下っていった。

刀根君は木製階段をぴょんぴょんと速く下って行く。休憩ベンチで待っていた彼に、そのことを言うと「ぼくは兎年ですから」と言った。しかしウサギは前足が短くて下りは苦手だから気をつけたほうがいい。

もう一つ下ったところの景色のいい休憩ベンチで休むことにした。昼食にはまだ早い時間だった。私が水を飲もうとすると、桑田氏が「待った！」と私を制し、「ビールを飲もう」と言った。

ビールなど持ってきているとは思っていなかった私は歓喜した。しかし「冷えてるの」と聞いた。桑田氏が出した缶ビールは銀色の断熱バスケットに入っており十分冷えていたので、刀根君も私もいっそう歓喜して、山のおいしいビールを飲んだ。さらに冷えた枝豆も出てきて、私らは山ならではの酒宴の喜ばしさを満喫した。そうするとそこに根が生えたようになり、そこで昼食ということとなった。

そこからは苗場のスキー場が見渡せた。高層のホテルがいくつもあり、夏はどのように利用されているのだろうかと思われた。

日差しが強くなってきたので、食卓をたたんで三国峠に降りていった。頂上に向かった人らが身を軽くするためリュックを峠の日陰のベンチに置きっぱなしにしていた。それをのけてベンチに横になって10分くらい昼寝した。ハエの羽音しかしない静かなひとときだ。眠りに落ちることはなかったが、快き思い出がふたつみつ連想された。最近思いがけなく10数年振りにダンスをしたこと、感動した映画「シャルウィーダンス」のこと、学生時代にダンスパーティーをブラスバンドで主催し、私はバーテン係りでついに踊らなかったが、赤のシャツと白のスーツ姿の私のバーテンぶりを仲間が感心したこと…。

シエスタのあと、峠から上州側の心持ち登りの山道を進むと、ずっと日陰で心地好い。しばらく行くと下の方で水の流れる音が聞こえてくる。そしてこの山道を横断する小さな水流が3ヶ所あり、このいずれかが晶子の清水ということだろう。冷水で顔を洗ったり、飲んだり、汲んだりした。

上州藩士の墓では説明文があった。上州で罪を侵して江戸に逃げた犯人を、上州藩士8人が追ってきて江戸で捕まえた。囚人籠に入れて人足4人に担がせ、上州に戻る際、三国峠の手前で表層雪崩に合い、先を行っていた藩士8人全員が死亡した。人足と犯人は難を逃れた。

更に進むとトイレ付き休憩所があり、そのそばを右に折れて山道を国道17号へと下っていった。国道に出て振り返ると、我々が出てきたのは、山側のコンクリート壁に設けられたわずかの隙間であり、ここがこの辺からの登山口である。よほど詳しい人でないところから三国山に入ることはあるまい。そのせいか、三国峠からここまでの山道で人とすれ違うことはなかった。

国道を三国トンネルの方向に進んでいると、道の谷側に廃屋となったドライブインがある。この脇から谷に下る道がありここを下って行くと秘湯法師温泉に到る。かなり急坂であるから、湯上がり後の登り道としては最悪である。

車に戻ると、この温泉に行くべく国道を下った。運転席に設置された新型ナビゲータを見ていると面白い。目的地を設定すると画面と女性の声で自動的に案内してくれる。しかしある所で近

道と思われた村道に入ると、ナビゲータはその道を知らされていなかったとみえて、我々の乗った車は画面上では道なき道を進んでいった。やがてナビゲーターにも登録された舗装道にもどると川沿いに三国トンネルの方向に戻っていった。その道は法師温泉まで通じており、そこで終点である。山間にしては広い駐車場があった。

外来者の入浴は午後2時までで受付終了だったが、遅れてきた我々は、桑田氏の交渉のおかげで長寿館で入浴できることとなった。一人800円であった。古い大規模の木造温泉旅館で、その建物を見るだけでもここまで来た甲斐があるというものだ。

脱衣所から大浴場をのぞくと、昔のままの木造で天井が高い。4つに区分けされた湯舟がある。昔は入浴客は湯舟のほとりで着替えていたのであろう、左右の壁に服を入れるための四角に仕切られたたくさんの木製の棚が今でも残っている。

湯煙におぼろだった湯舟の人が、浴場のすぐ外の庭に立てられた石碑の彫文字を読もうとするかのように湯舟より立ち上がり窓辺に身を寄せた。すると差し込む晩夏の日光の中にその上半身が入り、初めてそれが女性だったことがわかった。

ここ法師の湯は混浴だったのだ。湯に入ると床は砂利で所々に置かれた丸い石に越しかけるとちょうど首に湯面が来る。湯は自然湧出で、浴槽の底から湧き上がっているという。四つのうち、窓際の二つの湯舟がそれほど熱くないので私はその一つに入り山の疲れを湯に溶かした。

見ると「日本秘湯を守る会」と書かれた大提灯が高い天井の奥の脱衣所の上の方にぶら下がっていた。秘湯の定義とは何だろうかと考えてみた。秘密の湯場であれば、登山ガイドに載っていること自体、世間に秘密を暴露していて秘湯とは言えない。秘湯が秘境にある湯場ということであれば、それを守るといえるのはどういうことであろうか。そこに車が来れるようにしてしまったりもう秘境ではないから、それを守ろうという主旨を自ら放棄しているのではないか。そこで秘湯の定義は、思うに混浴場のことを指すのであろうと私は思った。法律の解釈によってはこのような湯場が存在することに問題があるのであれば、そのような法解釈に基づく行政から営業を守らねばなるまい。それで日本秘湯を守る会が発足したのだろう。これが「日本混浴場を守る会」では誤解を招きやすいということであろうか。

そのようなことを思いながら湯につかっていると中年婦人が浴場の入り口に来て、中を見て後ずさりした。混浴だということ知らなかったに違いない。外の廊下では、脱衣所が男と女と左右に別れているので、初めての人は浴場も男女別だと思い込んでしまう。しかし二つの脱衣所の次にある大浴場は一つなのだ。一旦躊躇した婦人は、湯につかっていた連れの男に呼ばれてそちらの方に行って、湯に身を沈めた。

湯舟には半円形の断面を持つ丸太が渡されている。私は両手で湯舟の縁をつかみ身体を湯に浮かべ両足をその丸太に載せた。少し身体を伸ばすと丸太が動いて位置がずれた。すぐに元の位置に戻したが、その時はそれが何のためにあるのだろうかという疑問すら抱かなかった。しかしあとで法師温泉のパンフレットを見ていると、与謝野晶子が次のような歌を詠んでいたことがわかった。

「草まくら手枕に似じ借らざらん

山のいでゆの丸太のまくら」

この丸太は、湯につかる人がまくらとするためのものだったのだろうか。

私は温泉から上がる時、いつも体を拭かないで脱衣所に戻り、身体をゆっくり乾かす。そうすることにより薬湯は身体にしみ込み、あるいは皮膚に留まり、薬効を発揮する、とあるバスガイドが言っていたのをずっと真に受けているからだ。そこでこの度も、私は脱衣所で着替えることもなく、竹編の長椅子に裸で座り身体が乾くのを待つ。刀根君はすでに湯から上がって待合室に行った。桑田氏はまだ湯舟につかって外の景色を眺めていた。その窓の上の方、高い天井に古い木製の掲示板が掛けてあり、「壽乃湯 いびやう りうまちす しきうびやう きわづらゐ せんきせんしやく さんぜんさんごのつかれ ちかこ りんびやう 右効能あり」と効能が草書で書かれてある。

外に出て長寿館内を歩いてみた。いろんな資料が陳列されており、川端康成もここにきたことがあり、歌を詠んでいる。しかし私の注意を引いたのは、1年くらい前に見た映画「眠る男」の浴場シーンはここで撮られたということだった。大浴場ではないが、やはり古い浴場で村人らが湯浴みするシーンだった。さらに一昔前にJRのフルムーンの宣伝の俳優上原と高峰の湯舟につかった姿のポスター写真もここで撮ったものだということがわかった。

この温泉旅館は川を挟んで広がっている。旅館の中の亘り廊下が橋になっており、川を見るとアヒルのつがいがいて、川岸に白い卵が無造作に転がっていた。温泉が湧いていてこの川は温いだろうから越冬できるのかもしれない。

外に出て写真を撮っていると秋の虫が鳴き始めていた。

帰路は刀根君が運転した。ナビゲータのおかげで方向音痴の彼も自信をもって運転することができるようになったというから、そのうち歩行者用の携帯ナビゲータも普及するだろう。そうすると迷子になる人はいなくなるかもしれない。しかしどんなに技術が進歩しても自分が今どこにゆくべきかまで教えてくれることはないからやはり人は道に迷い続けるとも思われる。

来る時と同様、高速道路はすいていたので、予定よりずっと早く高崎に着き、私は高崎駅で下ろしてもらい、名物のたかべんのラーメンを汗を噴き出しながら食べた。そして帰りの電車の中ではぐっすり眠った。

おわり

写真(photos):

[amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro](https://amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro)